

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の二演舞場B二
電話(五四二)五四七

清元協会

港区西麻布一の二の三の四八五
電話(四〇五)八〇〇

財団法人 古曲会

中央区築地四の二の十一
電話(五四五)三七七八

新内協会

品川区旗の台六の二七の二
電話(七八二)三九五

常磐津協会

目黒区上目黒四の三十三の十四
電話(七二五)一五一八

社団法人 長唄協会

中央区銀座二の十一の十九の四
電話(五四二)六五六

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二の十五の十二の四〇三
電話(五八五)九九一六

(五十音順)

後援 東京都

昭和六十年三月十日(日)

第一生命ホール

第一部 十二時半開演 四時終演

第二部 四時半開演 八時終演

'85 都民芸術フェスティバル

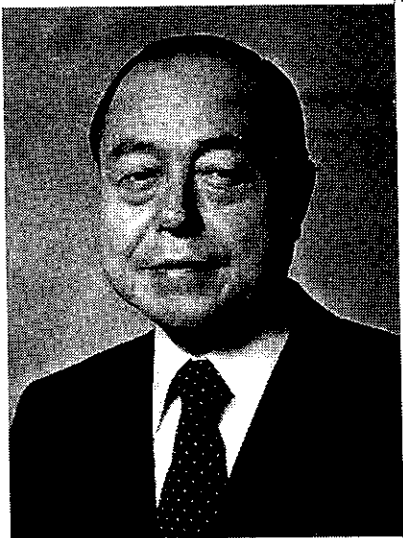
第十五回

邦楽演奏会

— 邦楽名曲選 —

'85 都民芸術フェスティバルによせて

東京都知事 鈴木俊一



今年も都民芸術フェスティバルのシーズンが参りました。例年この時期が近づきますと、発表前に都民の方々から問い合わせをいただき、この催しもすっかり都民のものとして定着している、ということを改めて感じているところです。

このフェスティバルは、へすぐれた芸術を、心ゆたかな、くらしの中へのキャッチフレーズのもとに、東京都が芸術文化団体の公演を助成し、できるだけ多くの皆さんに鑑賞していただくという趣旨ではじめました。

こんにち、技術革新が取り沙汰され、音声や映像はいたるところにあふれております。

居ながらにして楽しめる娯楽の数多くある中で、わざわざ時間をかけて会場へ足を運んでまでも鑑賞するということは、磨き上げられた芸術家の迫真の芸に接するという舞台芸術のすばらしさの故でありましょう。

東京都では、心のふれあいや潤いのある環境をつくることをめざして、昨年マイタウン'85―東京都総合実施計画を策定し、その中で、都民の皆さんが優れた芸術文化に接するとともに自らも創造活動に参加できるよう、各種施策の充実に努めているところであります。

今後とも、フェスティバルを一層充実させ、都民の皆様が優れた芸術に親んでいただきたいと思いますと考えております。

今年のフェスティバルが、都民の皆様が十分に楽しんでいただけるものとなれば幸いです。

この催しに参加し、都の芸術文化の振興の一翼を担って下さった邦楽連合会のみなさまの力一杯のご活躍を期待しております。

第一部 番組 (十二時半開演)

一、清元津山の月

同	同	同	浄瑠璃
清元	清元	清元	清元
梅美秋	梅多寿	紫寿文	梅
	上調子	同	三味線
	清元	清元	清元
	益代	梅丸	梅喜代美

二、河東廓八景

同	同	同	浄瑠璃
山彦	山彦	山彦	山彦
幸子	加珠子	みさ子	ちか子
	上調子	同	三味線
	山彦	山彦	山彦
	せい子	みな子	さわ子

三、新内明烏夢泡雪 (明烏・雪責)

上調子	三味線	浄瑠璃
鶴賀	鶴賀	富士松
若三郎	若狭	魯遊

四、長唄熊野

同	同	同	同	唄
吉住	吉住	吉住	吉住	吉住
小桃次	小貴三郎	小良次	小真吾	小三郎
同	同	同	同	三味線
稀音家	杵屋	花垣	稀音家	稀音家
新之助	弥四郎	嘉伸	助三郎	和隆

囃子

太鼓	大鼓	同	小鼓	笛
六合	梅屋	望月	望月	望月
新右衛門	右之助	左之助	左吉郎	長吉郎

五、義太夫生写朝顔話——宿屋の段——

浄瑠璃 竹本 土佐廣
三味線 鶴澤 寛八
箏 豊澤 幸治

六、箏曲 赤壁 賦
中能島欣一作曲

箏 鳥居 名美野
同 中田 名美妹
同 土屋 名美遊
同 高橋 名美憲
同 山下 名緒野
尺八 鳥井 誠

七、常磐津 大森彦七

浄瑠璃 常磐津 清勢太夫
同 常磐津 津太夫
同 常磐津 清若太夫
三味線 常磐津 文字兵衛
同 常磐津 八百八
上調子 常磐津 文字蔵

第二部 番組 (四時半開演)

一、義太夫 義 經 千 本 桜 — 鮎屋之段 —

お里竹本 駒之助
 維盛竹本 朝重
 御台竹本 綾之助
 若君竹本 越孝
 三味線 鶴澤重輝

二、新内 千日寺名残の鐘 (三勝半七)

浄瑠璃 鶴賀 甚代寿
 三味線 新内 仲三郎
 上調子 鶴賀 喜代寿郎

三、一 中都見物左衛門

浄瑠璃 宇治 文彩
 同 宇治 文美子
 同 宇治 紫松
 三味線 宇治 文喜
 同 宇治 文好

四、清元 筐花乎 向橘 (吉原雀)

浄瑠璃 清元 延千嘉勇
 同 清元 延勇輝
 同 清元 延正路
 同 清元 延古摩寿
 三味線 清元 延古摩
 同 清元 延八寿美
 上調子 清元 延秀喜之

五、常磐津 恩 愛 曠 関 守 (宗 清)

浄瑠璃	常磐津	菊三八	三味線	常磐津	松房
同	常磐津	千尾寿	同	常磐津	菊光
同	岸沢	式满佐子	上調子	常磐津	清之

六、三曲 千代 の 鶯

尺八	箏	同	三絃	太田里子
青木鈴慕	太田久子	安藤惠美	太田里子	

七、長 唄 柳 雛 諸 鳥 囀 (鶯 娘)

同	同	同	同	唄	同
杵屋佐臣	杵屋佐琴	杵屋吉与志	杵屋佐美奈	杵屋佐登代	三味線
同	同	同	同	同	杵屋佐吉
太鼓住長十郎	大鼓仙波光晴	小鼓堅田喜三久	笛 鳳 声 晴 光	杵屋佐之助	杵屋小佐吉

歌詞と解説 (演奏順)

(解説 竹内道敬)

第一部

一、清元津山の月

本山荻舟作詞、三世清元梅吉作曲。大正十三年四月、岡山市で開かれた博覧会の余興として演芸場で初演。七世坂東三津五郎の振付で、土地の芸者が踊ったという。
作詞の本山荻舟が岡山出身というので、五段返しの所作事「吉備三國絵巻」を書いたが、その四段目。はじめは「鶴山の月」の題だったらしい。このほかは長唄、常磐津曲だったが、今はすべて廃曲。このように地方で初演された曲が、後世まで残ったのは珍しい。
津山藩に仕官している名古屋山三を慕って、京都からはるばる出雲のお国が尋ねて来て、月の美しい津山の山道で出逢う。そこで二人は手をとって喜びあい、昔を思い出しながら、

かぶき踊りや槍踊りを踊るといふ場面。夢のように美しい情景で、山三はもしかしたらお国の見た幻かも知れない。

へ美作や、久米の皿山さらさら、逢わで立つ名のうらめしや、うすき契りの夏衣、都の宿に脱ぎ捨てて、なれぬ旅寝の草枕、へ幾山坂を越えたやら、君が命を長き世の、月の鶴山に来てみれば、山家の秋は早やふけて、木々の紅葉に鹿を鳴く、ここにもつまを恋うやらん、古里ならぬ古里に、今は便りの文さえ絶えて、身は空蟬のうつつなく、もぬけの殻とやつれても、さらにえ捨てぬ恋の道、思い暮してうかうかと、月の山路をたどり来る。

へお国じゃないか。へ山三さんか、逢いたかったとかけ寄って、先立つ涙あとさきも、言葉はなくて泣き交す、人目忍ぶの通い路ならば、月にも行く闇にも行く、晴れて逢う夜は面はゆや。
へ山三思えば照る日も曇る、冴えた月夜も闇になる、へわれも昔は前取りの、槍師々々は多けれど、名古屋山三は一の槍、小田原攻めのさきがけに、槍の山三とうたわれし、思い出も夢なれや、
へ私の初めて見た主は、京一番のよい男、繻子の鬢付刷毛長に、さても寛潤風流な、真紅下緒の長刀、面影はあるものを、誰が吹きわけて行く雲の、心隔つる旅衣、とても住むなら浅茅の里に、機も織りまじよ砧も打とう、ふけて砧の音きけば、よその恋さえ気にかかる、やるせなや、
へ移り香残る対小袖、昔床しきなりふりの、月にはとても寝られねば、いざや踊り明かそうよ、へ揃うたく、踊り笠、春は花笠、夏網代笠、秋の菅笠、冬目塞笠、浮世忍ぶの深編笠も、姿形で若さは知れる、花の都の御所塗笠よ、月の笑顔に照る紅葉笠、さても見事に揃うたり、
へそこで振り出せお手廻り、大事の前の居合腰、寸よし振りよし形もよし、振りやれお振りやれ大鳥毛、槍は鎌槍十文字、おっ取り揃えた長刀、名古屋山三の槍踊、面白や、へ有明の、月毛の駒に片手綱、引きとどめとも止まらぬは、昔男やみやび男の、はやり乱るる恋の道芝。

二、河東廓八景

狂言作者宝田寿助(劇神仙)の遺稿を、五世山彦河良が作曲、弘化元年(一八四四)四世十寸見河洲の一忌忌追善浄瑠璃として、河内屋半次郎方で初演された。
中国湖南省洞庭湖あたりの八つの名所を瀟湘八景という。日本ではこれにちなんだ近江八景をはじめとして、さまざまな八景が見立てられ、邦楽にも多くの「八景もの」が作られているが、これもその一つ。吉原の名所を四季にしたがって述べたもので、今は失われた江戸の情緒があらわれている。時代の好みで吉原になっているのは、今の人には理解しにくいかも知れない。

三、新内明烏夢泡雪(明烏・雪責)

明和六年(一七七九)七月三日、伊之助三芳野の心中事件がおきた。男は浅草の御用商人の養子で二十一歳、女は吉原萬屋の遊女で二十四歳と伝える。二人は前の年からなじみを重ね、金につまり、男は勘当、女は他の客を断るといふ始末で借金はいえるばかり。二人は廓を抜け出して心中となった。この事件にヒントを得て鶴賀若狭掾が新内に作曲したのは、安永元年(一七七二)のことと伝える。ニュース性の強いきわものだったが、曲がよく出来ていたので、今日まで語り伝えられ「蘭蝶」とともに新内節の代表曲となった。全曲を通して演奏すると一時間半以上もかかるので、下の「雪責」を一部省略して演奏する。昨年この会場で上の「浦里部屋」をきいた方には、一年がかりということになる。
春日屋時次郎は山名屋の浦里となじみを重ね、そのための借金で首がまわらない。時次郎は、あがる資格もないのに浦里の部屋へ忍んでいたが、遺子に見つかり、若い衆に表へ叩き出されてしまう。残された浦里は禿のみどりとともに庭の古木に縛りつけられ、折りから降り来る雷の中で、亭主に責められる。そのあとの浦里の嘆きから。
隣りの二階からきこえる三下りのめりやすへ昨日の花は…
…が効果をあげる。このあたりは宮内節の「夕ぎり」の影響かも知れない。時次郎が屋根伝いに助けに来て、逃げ出したと思つたのが夢であつたというのは、題名にもあらわれている。

へまず春の仲の町、へ入相霞むたそがれに、簾かかぐる軒のつま、大門口の晴嵐と、いえば岩間の水洩らさじと、結ぶ契りの盃を、へさすが恥らう突出しは、見て見ぬふりの流し目に、へ照り添う顔の夕日影、初会の夕照これならん。
へ忍ぶ難に身を焦す、闇の螢の間夫狂い、関に閑守る神々も、ああうらめしき裏茶屋の、へ蒲団に濡るる夜の雨、へ衰虫すたく夕暮の、淋しさ知らぬ盆燈籠、光りは露の玉菊か、へ二十五絃の爪音は、琴柱に落つる雁の声、へ空櫓押すかと聞き迷う、これや座敷の帰帆にて、風の便りの玉章を、頼み田の面の飾供え、へ月の名に負う八文字、鶴の歩みの白小袖、これぞ暮雪とさながらに、三浦山口家々の、名取りの君のえくぼには、
三下りへしんぞ命もみな投節の、へ声も曇らぬ秋の月、へ櫺子に洩るる霜の色、へ土手の木枯し誘い来て、へ晩鐘寒き夕べにも、浮かれ廓の全盛は、夢かうつつか白柄組の、
ナオルへその大小の神祇組、天の浮橋かけ初めて、恋教え鳥妹背鳥、せきれい組のせき立てて、いざ供せよというまに、長が許へと怠がるる、伊達の遊びぞ面白き。

へ降りつもる、浦里あとをうち眺め、涙にくれていたりしが、
浦里「ええお情あるお葉なれど、こればかりはどうも忘れぬ、おゆるしなされて下さるせ、まだこの上にとどのような、悲しい苦しい責苦

でも、わしゃ厭やせぬ、どうなつても思い切られぬ、いつそ添われぬものならば、一緒に死にたい、時次郎さん、殺して下んせ、わしゃ死にたいわいのう。

三下りへきのうの花は今日の夢、今はわが身につまされて、義理という字は是非もなや、勤めする身のままならず(中略)

浦里「これみどり、さぞそなたは悲しから、わしが憎かるこらえてたも、悪い女郎に使われて、思わぬ苦し堪忍しや、今宵に限りこの雪は、何の報いぞさぞ寒かる、可愛いやのう。

みどり「いえいえ私は寒うはござんせぬが、次郎さんはあのように若衆に叩かれさんしたが、お前は口惜しうござんしょう。私も悲しうてならぬわいのう。

浦里「おおよういうてたもつた、そなたまでもそのように、へ主を思つてたもるもの、わしが心を推量しや、(中略)粋の粋ほどはまりも強く、ただなつかしうとしさの、愚痴になるほど恋しいもの、たとえこの身は淡雪と、ともに消ゆるもいとわぬが、この世の名残今一度、逢いたい見たいとしゃくりあげ、狂気の如く心も乱れ、涙の雨に雪とけて、前後正体なかりけり。

へ男はかねて用意の一腰、口にくわえて身を固め、忍び忍んで屋根伝い、それと見るより悲しさの、伝えて携む松が枝も、今宵一夜のかけ橋と、足もそぞろに定めなき(中略)

へ難なく下へ降り立って、二人が縄を切りほどき、時次郎「これ浦里、ここで死ぬるはずすけれど、逃るだけは落ちてみん、ついでこの塀を越すばかり、幸いこれなる松の枝、伝うて行かんもろともと、

へ互いに手早く身ごしらえ、みどりとともに取りすがる、へ可愛いやこの子は何とせん、へお心得たり、と、へみどりを小脇に引つ抱え、かいかいしくも時次郎、松の小枝を浦里に、しっかと持たせあたりを見廻し、忍び返しを引つばずし、梯子となしてさし下し、ようよう三人塀の上、降りんと思えど女の身、浦里は胸を揺え、へ死ぬると覚悟極めし身の上、何かいとわんさあ一緒と、手を取り組んで一足飛び、へげにもつともとなづきて、互いに目を閉じ一思い、ひらりと飛ぶかと見し夢は、さめてあとなく明鳥、後の噂や残るらん。

も、涙に咽ぶばかりなり、ただ然るべくはよきように申し、しばしの御暇を賜わりて、今一度まみえおわしませ、さなきだに親子は一世の中なるに、同じ世にだに添い給わすば、孝行にもはずれ給うべし、老いぬればさらぬ別れのありといえは、いよいよ見ましく欲しき君かなと、故事までも思ひ出の、涙ながらに書きとむ。

へ老母の労りはさる事なれど、この春ばかりの花盛り、いかでか見捨て給うべき。へ御言葉返すは恐れなれど、花は春あらば今に限らず、これは仇なる玉の緒の、長き別れとなりやせん、ただ御暇を給わり候え。

へいやあまりに心弱き、身に任せては叶うまじ、いかに心も慰さめめ、花見の車同車にて、ともに心を慰さまんと、へ牛飼車寄せよとて、牛飼車寄せよとて、これも思ひの家の内、はや御出と進むれど、心は先に行きかぬる、足弱車の力なき、花見なりけり。

二上りへ名も清き、水のまにまにとめくれば、山は音羽の花盛り、へ四条五条の橋の上、老若男女貴賤都鄙、色めく花衣、袖を連ねて行末の、雲かと思えて八重一重、咲く九重の花盛り、名に負う春の景色かな。

本調子へげにや、思い内であれば色外にあらわる、よしやよしなき世の習い、嘆きてもまたあまりあり、へ清水寺の鐘の聲、祇園精舎をあらわし、諸行無常の、二上りへ声やらん、地主権現の花の色、沙羅双樹の理なり、三下りへ南を遙かに眺むれば、大悲擁護の薄霞、熊野権現の移ります、御名も内じ今熊野、稻荷の山の薄紅葉の、青かりし葉の秋、また花の春は清水の、ただ頼めたのもしき、春も千々の花盛り、へいかに熊野一さし舞い候え。

本調子へ山の名の、音は嵐の花の雪、深き情を人や知る。へこのうのうにわか村雨のして、花の散り候はいかに。へげにげに村雨の降り来つて、花を散らし候よ。へあら心なの村雨や、春雨の降るは涙か、降るは涙か桜花、散るを惜しまぬ人やある。へよしありげなる言葉の種、取り上げみれば、へいかにせん、都の春も惜しけれど、へ馴れし東の花や散るらん、へげにあわれなり道理なり、この上は、はやはや暇とらすぞ、とくとく吾妻へ下るべし、へあらありがたや嬉しやな、かくて都に御供せば、またもや御意の変るべき、ただこのままにお暇と、夕告げの鳥が啼く、東路さして行く道の、やがて休ろう逢坂の、へ関の戸さしも心して、へ明け行く跡の山見えて、花を見捨つる雁がねの、それは越路われはまた、東に帰る名残かな、東に帰る名残かな。

四、長唄熊野

明治二十七年八月、稀音家浄観が六四郎時代に作曲。この時二十一歳だった。翌二十八年秋、東両国の井生村楼での大演奏されてから知られるようになった。浄観の処女作は二十七年二月の「横笛」なので、その第二作目にあたる。

原拠は能の「熊野」。同じ題材を扱った曲は、河東節や山田流等曲にもあるが、これは作調の六郷新三郎のアイディアで、能の歌詞をほとんどそのまま、巧みにアレンジされている。そのため話の筋もよくわかり、気品が高く、すぐれた文章で、とくに後半がいいといわれている。全体を通して詞の部分が多く、調子変りが多いので、変化に富み、楽しめる曲になっている。

へこれは平の宗盛なり、さても遠江の国地田の宿の長をば、熊野と申し候、久しく都にとどめ置き候ところに、老母の労りと申し、たびたび暇を乞い候えども、この春ばかりの花見の友と思ひ、未だ暇を出ださず候。いかに誰かある。へ御前に候。へ熊野暇の事を申さば、こなたへ申し候え。へかしこまって候。

本調子へ草木は雨露の恵み、養い得ては花の父母たり、まして人間にいておや、あら御心もとなや候。へいかに申し上げ候、熊野の御参りにて候。へこなたへと申し候え。へかしこまって候、こなたへ御入り候え。

へ老母の方より文を上げて候ほどに、これをそと御目にかけとう候、へなんと、老母の方より文と候や、さらばそれにて読み候え。へかしこまって候。

文の段へ甘泉殿の春の夜の夢、心を砕く端となり、驪山宮の秋の夜の月、終りなきにしもあらず、末世一代教主の如来も、生死の掟をば遍れ給わす、過ぎにし如月の頃申しし如く、何とやらんこの春は、年ふりまさる朽木桜、今年ばかりの花をだに、待ちもやせじと心弱き、老の鶯逢う事

五、義太夫生写朝顔話一宿屋之段

天保三年(一八三二)正月、大阪竹本座初演。山田案山子(近松徳叟)遺稿。

原拠は講釈師芝屋司馬叟の「舞」という長話で、これを近松徳叟が脚色したが、上演されないうちに絵入り小説「朝顔日記」になり、ベストセラーになった。それを奈河晴助が脚色したものを、さらに浄瑠璃にしたもの。

秋月弓之助の娘深雪は、宇治の猿狩で宮城阿曾次郎と恋し合ったが、事情あつて別れる。のち深雪には、大内家の臣駒沢次郎左衛門との縁談がおきたが、それが実は阿曾次郎と知らずに家出してしまふ。深雪は両眼を泣きつぶし、むかし阿曾次郎の書いてくれた朝顔の歌を唄って歩かうち、島田の宿で駒沢となった阿曾次郎に逢うが、阿曾次郎は同宿している岩代の手前名乗らず、扇を渡して去るといふ場面。

このあと、それを知った深雪は阿曾次郎を追つて大井川まで行くが、折からの雨でひと足ちがいで川留になつて逢えない(大井川の段)がある。本来この作品は、大内家のお家騒動とからむ物語だったが、今では深雪と阿曾次郎の恋物語の件が主として上演されるようになった。朝顔の歌が効果を出している。

へむざんなるかな秋月の、娘深雪は身につもる、歎きの数の重なりて、舟失なう目無鳥、杖柱とも頼みてし、浅香はもろく朝露と、消え残りの身一つを、さすがに捨てても縁先の、飛石さぐる足許も、危き木曾の丸木橋、渡り苦しき風情にて、ようよう坐して手を仕え、

「召しましたはこれお座敷でござりますか、拙い調べもお笑い草、おはもじ様や」と会釈する、顔も深雪がなれの果て、ふびんの者やとせぐり来る、涙のみこみ控えている。

岩代はそれとも知らず「やあ見苦しいそのままで、我々が目通りへうせたら、ああ聞き及んだ朝顔めな、ええ、きりきり立って失せおろう」「あいや岩代殿、そう没義道に仰せられな、この方に呼び寄せたればこそ、思いがけのう、あいや、思いがけのう来たものを、叱るは武士の情にあらず、こりや女、大儀ながらその朝顔とやらの歌、ささ早く唄うてきかせい」と、望む心は千万無量。

知らぬ岩代面ふくらし「さてさて駒沢氏には、いやもきつい御執心、こりやこりや盲、なんなりとも、ええ唄え唄え、ささ早く早く」「はいはい、唄いまするでござります」と、焦がるる夫のあるぞとも、知らぬ盲の探り手に、恋ゆえ心つくし琴、誰かは憂きを斗為吟の、糸より細き指先に、差す爪さえも八つ橋の、やつれ果てたる身をかこち、涙に曇る爪しらへ、

露のひぬ間の朝顔を、照らす日かけのつれなきに、あわれひと叢雨のはらはらと降れかし、
「うむ、夫を慕う音律の、我々が身にも思いやられて、思わずも感涙いたした、のう岩代殿」「いかさま、琴といひ器量といひ、いやも、なかなか感心仕る、いやなに朝顔とやら、そこは定めて冷えるであろう、身共が傍で今一曲、さあ所望だ所望だ」「あいや岩代殿、もう許しておやりなさい」「さりとは駒沢氏、身共が望むを止めさつしやるは、そりや意地の悪いと申すもの」「あいやさうではござらねど、かれも定めて疲れましようと存じて」「ははあ、しからば曲は止めにして、こりやこりや女、そちも腹からの非人でもあるまい、身の上話もまた一興、話してきかせ、ささどうだどうだ」

「はいはい、よう問うて下さります、お言葉に甘えお話し申すも恥かしながら、もと私は中国生れ、様子あつて都の住居、一年宇治の蜚狩りに焦れ初めたる恋人と、語らう間さ夏夜の夜の、短い契りの本意ない別れ、ところ尋ぬる便りさえ、思うにまかせぬ国の迎い、親々にいざなわれ、難波の浦を船出して、身を尽したる憂き思い、泣いて明石の風待ちに、たまたま逢いは逢いながら、つれなき風に吹きわけられ、国へ帰れば父母の、思いも寄らぬ夫定め、立つる襟を破らじと、屋敷を抜けて数々の憂き目をしぎ都路へ、登つてきけばその人は、東の旅と大きく悲しさ。またも都を迷い出で、いつかは廻り逢坂の、関路をあとに近江路や、身の終りさえ定めなく、恋し恋しに目を泣きつぶし、物の文色も水鳥の、

七、常磐津大森彦七

福地桜痴作詞、岸沢仲助作曲。明治三十年十月、東京明治座初演。九代目市川團十郎の大森彦七で初演。新歌舞伎十八番の一。

ここは伊予の国松山の山中。大森彦七が猿楽の催しのある御堂へ急ぐうち、若い娘と道連れになる。増水した川に来たので、娘を背負って渡りかけると、娘は鬼女となって彦七に斬りかかる。とりおさえてみると、娘は湊川で討死した楠正成の娘千早姫で、彦七を父の敵とやらんでのことだった。彦七は正成最後のさまを物語って誤解をとく。そしてその孝心にめで、正成が所持していた菊水の宝剣を与えるのだが、正成の怨霊があらわれて奪い去ったことにし、彦七は狂気をおおおうという場面。

もと五代目尾上菊五郎のために書いてあったが、菊五郎の気に入らなかつたらしく、そのままになっていたという。なお、はじめは道後左衛門が出たが、今は二人だけの物語りとなっている。

誰ガカリへ頃は北朝建武三年春の暮、ここに伊予の国の住人大森彦七盛長は、御堂の庭に急がんと、まだ夜深きに立ち出でて、へたどる山路に道芝の、淋しさをこつ賤の女を、いたわり連れ立つ夜の道。

二上りへ弥生の末の若葉たち、残んの花の白雪も、おほろに見ゆる小夜中に、雲の脚さえ叢立ちて、笈にひびく水の音。本調子へ身も軽々と賤の女が、石を伝うて川中に、立てば危うき瀬まくらに、押し流されん風情なり。

へ昨日の雨に水増せしか、小川なれどもこの水勢、女性の身にて徒渡りとは及ばぬ事、それがし背負うて参らせん。へそれでは恐れ入りですが、仰せに甘えお背中に、へさあ遠慮なく、おかかりあれ。へ乙女を背負い

陸にさまよう悲しさは、いつの世いかなる報いにて、重ね重ねの歎きの数、あわれみ給え」とばかりにて、声を忍びて歎きける。

六、箏曲赤壁賦

松本一太の訳詩に中能島欣一が作曲。昭和九年発表。赤壁というのは、中国湖北省にある名勝地で、蘇東坡の詩で知られている。

仲秋の名月の夜、長江に舟を浮かべて酒を酌み交し、古戰場をしのんで昔を語り合うという情景を山田歌曲にしたもの。原詩のもつ幽玄な味がよくいかされておられ、昭和期作曲の代表作の一つとなっている。

へ月明らかに星稀に、南に飛ぶや鶴と、戟を横たえ歌いけん、勝ち誇りたる英雄も、時は移りて今いづこ。へ浮世に遠き身の軽く、一葉の月の夜を、酒汲み交す面白や、消ゆれば夢か糸遊の、儂なき身をば天地に、容れて短きいのちかな。

へ流れもつきぬ長江の、月を肴に夜もすがら、酌む盃の数々や、欠けては盈ちつ、盈ちては欠くる、笑いつ泣きつ叢雲の、晴るれば円き月の顔、へああ、逝く水は日夜を捨てず、千秋万古流れは尽きず、愚かの迷い何をか淀まん、かの山間の明月と、かの江上の清風は、見れども飽かず、取れども尽きず、皎々として千里を照らし、瓢々として万戸に入る、あら面白の風情かな、へいざ盃を酌み交し、流るる水に舟をまかせん、へ流るる水に舟を任せん。

大森が、みなぎり落つる谷川の、流れを渡る折こそあれ、へさつと吹き来る夜風の、空にきらめく北斗の光、不思議や乙女の相好は、たちまち変る悪鬼の姿、鉄杖ならで水の刃、盛長めがけ斬りかかる。へ女ながらも希代の早業、あなたへ離れ、こなたへ飛び、かげろう稲妻蝶千鳥、下弦の月影水の面、岩に砕けてちらちらら、へさすの盛長驚きしが、もとよりきこゆる無双の勇士、なんなく乙女を取つて押さえ、へ女性の身にて盛長を、だまし討たんとは何者なるぞ。へ照る月影に顔うち眺め、へ御身の目元鼻筋まで、正成殿に生写し、疑いもない楠家の御息女、へいかにも妾は楠河内守が娘の千早、なにゆえあつて湊川の合戦に、父上に詰腹切らせ、菊水の宝剣を奪い取つては立ち退きしぞ、その恨みをはらさんと、待ち設けたる今宵の出逢い。へあつたばれの御心底ざりながら、御身の恨みをとかため、その日の軍のあらましを、盛長語り申すでござろう。へそれにてお聞きあれかしと、盛長は座を構え、へさても建武二年の皐月、正成殿には一族引き連れ、へ旭に輝く菊水の、旗ひるがえし堂々と、湊川へとうつて出で、海陸二手の足利勢を、引き受け引き受け攻め破り、へ風に木の葉を散らす如く、へ敵を惱まし戦いしが、一村ある家に走せ入りて、息を休めておわしたり。

へそれがしかくと見るよりも、へいざ一戦と押し寄せれば、御着長を脱がせられ、すでに最後の御支度ありしが、へ来れやおうと立ち上り、ふたたび物の具召さんず有様、へこはもつたいなやと押しとどめ、御最後すすめ奉れば、へ御心静かに称念唱え、正成殿と刺し違え、御痛わしくも御兄弟、同じ枕に臥し給う。

へ父が最期の物語り、きくに涙も滝津瀬や、むせぶ小川の水増して、胸もただよう切なきに、姫は御声くもらせて、へその御物語をきくからは、御身を父の敵なりと、恨みしは妾が誤り、また二つには御身が預る菊水の宝剣手に入れて、弟正行に得させんと、願ひし事も空頼み、クドキへ故郷へ帰る雁金の、一羽残りて恥かしや、身の片よりの苧環に、繰りてかえらぬ朽糸の、乱れて絶ゆる玉の緒と、(中略)御暇申す大森どの、へ心の覚悟死出の旅、力なくなく立ち給う、御有様の痛わしさ。へ盛長しばしと押し止め、へあいや待たれよ千早姫、御身の孝心義烈に感じ、菊水の宝剣御譲り申そう、へええ、へ楠家の息女千早姫に、この菊水の宝剣を、譲らばこそ悪しからめ、幸いなるかな鬼女の面、楠判官

正成殿、怨霊あらわして悪鬼となり、この盛長を悩まして、宝剣奪い去りたりと、世間に披露いたされよと、へ剣を取って差し出せば、姫は嬉しさをやる方なく、落ち散る面ふたたび掛け、宝剣取ってすつくと立ち、(中略)へさてこそ汝は楠の怨霊なりしか、やわか宝剣渡そうや、へなにを。

へまた叢立ちし雨雲に、争う姿も月落ちて、暁近き明星の、きらめく光りちらちら、見えつ隠れつ悪鬼の姿、見失いてぞ失せにける。

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそお出かけ下さりまして、ありがとうございます。何かと不行届の点もありますですが、お許しを願ひまして、どうぞごゆつくりとお楽しみ下さいますよう、お願い申し上げます。

今までは、このようにしてまとまって鑑賞していただく機会は、少なかつたように思います。その少ない機会を大切にしようとして、出演者も一生懸命でございます。これからもどうぞ続けて邦楽に変らぬ御支援をいただけますようお願い申し上げます。

来年も三月九日(日)に、このホールでの演奏会を予定しております。番組がままりましたら御案内をお送りいたしますので、はさみ込みのアンケート用紙に、おところ、お名前をお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日おき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願いを申し上げます。

ありがとうございました。

第 二 部

一、義太夫 義 経 千 本 桜— 鮎 屋 之 段 —

延享四年(一七四七)十一月、大阪竹本座初演。竹田出雲、三好松洛、並木千柳(宗輔)合住。時代物五段。壇の浦で没落した平家一門の後日物語が中心で、この鮎屋は三段目にあたる。

平重盛に恩顧をうけた吉野下市の弥左衛門は、重盛の子維盛を弥助と名を改めさせて、かくまっている。弥左衛門の娘お里は、それとは知らず弥助に思いを寄せ、祝言することになる。

一方主馬の小金吾は、若葉の内侍と六代君の供をして、やはり維盛を尋ねて来たが、追手の猪熊大之進たちに取り囲まれ、討死をしよう。内侍と六代君は危くのがれ、この鮎屋へ来たところから。

この「千本桜」は、前年初演の「菅原伝授手習鑑」、翌年初演の「仮名手本忠臣蔵」とともに、日本演劇の三大名作といわれる作品。そして、二段目の渡海屋(碓知盛)、三段目の木の実、この鮎屋、四段目吉野山道行、川連館などは、今でもよく上演される。とくにこの鮎屋と道行は喜ばれている。今日は時間の都合で、その前半、お里のクドキまで。

へ春は来ねども花咲かず、娘がつけた鮎屋ならば、なれがよかると買いに来る。風味もよし野下市に、売り弘めたる所の名物、釣瓶鮎屋の弥左衛門、留守のうちにも商売に、抜け目も内儀が早演に、娘お里が片擗、裾に前垂ほやほやと、愛に愛持つ鮎の鮎、押さえてしめてなれさする、うまい盛りの振袖が、釣瓶鮎とはものらしし。

へ神ならず仏なればそれごとく、知らぬ道をば行き迷う、若葉の内侍は若君を、宿ある方へ預け置き、手負いの事も頼まんと、思い寄る身も縁のはし、この家を見かけ、戸を打ち叩き、一夜の宿と乞い給えば、維盛はよい退き汐と表の方、叩く扉に声を寄せ、「このうちは鮎商売、宿屋ではござらぬ」と、愛想のないが愛想となり、「いやこれ申し、幼きを連れた旅の女、せひ一夜」と宣うにぞ、断りいうて帰さんと、戸を押し開き月影に、見れば内侍と六代君、はつと戸をさし内の様子、娘の手前もいぶかしく、そろそろ立ち寄り見給えば、早くも結ぶ夢の体、表に内侍は不思議の思ひ。

へ今のはどうやら我が夫に、似たと思えどなりかたち、頭も青き下男」よもやと思ひ給ううち、戸を押し開いて維盛卿、「若葉の内侍か六代か」と宣う声に「ひやあ、さては我が夫」「父様か」「のうなつかしや」と取りすがり、詞はなくて三人は、泣くよりほかの事ぞなき。「まずまず内へ」と密かに伴ない「今宵はとりわけ都のこと、思い暮していたりしが、親子ともに息災で、不思議の対面さりながら、それがしこの家にいることを、誰が知らせしぞことにまた、はるばるの旅の空、供連れぬも心得ず」と、尋ね給えば若葉の君「都でお別れ申してより、須磨や八島のいくさを案じ、一門残らず討死と、聞く悲しさも嗟峨の奥、泣いてばかり暮せしに、高野とやらんにおわするという者のある故に、小金吾召し連れお行方を心ざす道追手に出合い、可愛いや金吾は深手の別れ、頼みも力もない中に、めぐり逢うたは嬉しいが、三位中将維盛様が、このお姿はなににごとぞ、袖のないこの羽織にこのお頭は」と、取り付いて咽び、絶え入り給うにぞ、面目なさに維盛も、額に手をあて袖をあて、伏し沈みてぞおわします。

へ涙のうちにも若葉の君、伏したる娘に目を付け給い、「若い女中の寝入りばな、ことに枕も二つあり、定めてお伽の人ならん、かくゆるかしきお暮しなら、都の事も思ひ召し、風の便りもあるべきに、打ち捨て給うは胸愁」と、恨み給えば「ほほう、それも心にかかりしかど、文の落

ち散る恐れあり、わけてこの家の弥左衛門、父重盛への恩報じと、われを助けてこれまでに、重々厚き夫婦が情、なにがな一礼返礼と、思う折柄娘の恋路、つれなくいわば過ちあらん、かえつて恩が仇なりと、飯の契りは結べども、女は嫉妬に大事も洩らすと、弥左衛門にも口留めしてわが身の上は明さず、仇な枕も親どもへ、義理にこれまで契りし」と、語り給えば、伏したる娘たえかねしか、声あげてわつとばかりに泣き出だす。「こはなにゆえ」と驚く内侍、若君引き連れ逃げ退かんとし給えば「のうこれお待ち下され」と、涙とともにお里は駆け寄り「まずまずこれへ」と、内侍若君上座へ直し、

「私は里と申してこの家の娘、いたずら者憎い奴と、思し召されん申しわけ、過ぎつる春の頃、色珍らしい草中へ、絵にあるような殿御のお出で、維盛様とは露知らず、女の浅い心から、可愛いらしいとしらしいと、思い染めたが恋のもと、父もきこえず母様も、夢にも知らして下さつたら、たとえ焦がれて死ぬればとて、雲井に近き殿方へ、鮮屋の娘が惚れらりよか、一生連れ添う殿御じやと、思い込んでゐるものを、二世の固めは叶わぬ親への義理に契つたとは、情ないお情にあずかりました」と、どうと伏し、身をふるわして泣きければ、

二、新内千日寺名残の鐘(三勝半七)

元禄八年(二六九五)十二月、大阪千日墓所で男女の心中が発見された。二人は縋と縋をかたく結び合せていたので評判になった。男は大和国五条新町の赤根屋半七三十四歳、女は大阪長町美濃屋の養女三勝二十四歳、男の職業は蕎麦屋、女は下級の湯女とも女舞とも伝える。

翌年正月大阪岩井半四郎座で「蕎の色揚」として上演されたのが大当り、百五十日間の興行。三勝半七の心中はさらに有名になり、都音頭にうたわれ、歌祭文も作られた。続いて享保四年(一七一九)に「笠屋三勝廿五年忌」が浄瑠璃に

作られ、さらに延享三年(一七四六)に「女舞剣紅楓」が上演された。その五段目を鶴賀若狭が脚色、新内化したもの。半七には許嫁の女房お園があり、三年前から蕎麦屋に来て住んでゐるのだが、半七は踊子の三勝となじみ、お通という子供までゐる。お園は病氣になつてゐるので、見るに見かねた半七の母が、三勝を尋ねて来て、半七と縁を切つてくれと頼むところ。一夜流れの……はよく知られた三勝のクドキ。なお、これをさらに改作したのが「艶容女舞衣」で安永元年(一七七二)十二月の上演。その「酒屋の段」もよく知られており、今頃は半七さん、どこにどうしてござろうぞ」の文句は有名。

「この広い大阪に、住む所さえ長町と、言の葉草の露深き、裏の木枯し吹きそらす、美濃屋と書きし目印の、暖簾の文字は太けれど、細き煙りのかせ世帯、浮名にふれし三勝が、娘お通の手を引いて、樂屋戻りのとなりなりも、伏見常盤に異ならず、(中略)

「四十路あまりの女房が、用ありそうに表口の、暖簾の家名にこうなづき、へはい、ちと御免なざりませ」とずつと入り、「こなさんが踊子の三勝殿というのか、つい逢うた事はなけれど、五年この方きき及んだ三勝殿、私や大和の五条、蕎麦屋の半七が母でござる」「へえ」とびつくり、「あのそれは」といわんとせしが気味悪く、うろろろするを見てとつて、「いやこれ三勝殿、もしやあなたを恨みに来たかと思わしやろが、さらさらそうした心はない、草で育つた大和の女子も、梅の色よい浪速の女郎も、色に迷うは、へ同じ事、私やこなさんに礼儀に來ました、あの見る影もない半七にほだされて、何ぼの出世も目につかず、可愛いがつて下さると、かげでいてどの母でも、嬉しがるまいようはない、ここにお通という子まで儲けた三勝殿、まめな顔見て嬉しい」と、余念なければ気も落ちつき、「半七さんの母御さんとて、さつても強い御すいほう、そう御存知の上からは、何を隠さんようもなく、真実ほんの母さんに、逢うた心とちとけて、底意渚の海女小舟、漕ぎ終せたる如くなり。

「いやはて、世の中に、君傾城を歴々が、嫁にするもある習い、ああ互に好いた同士、半七と夫婦にして、睦まじい顔見るならば、老行く末の

「楽しみと、明暮思つています」と、へきいて飛び立つ嬉しさに、手を合わすればその手をとり、ああ、思う事ままならぬこそ浮世なれ、へ私やこなさんに無心があつてきました」と、言葉のうちより、「へこれはいかな、頼むの無心とは他人向き、どのような仰せでも、そむかぬが嫁の役」と、いう顔見るより涙ぐみ、「近頃無心な事ながら、半七と縁を切つて下され、へえ」とびつくり、「あの半七さんとかえ、へおお、いかにも、へいいえいいえ、そりやならぬ、わしゃいやじや。

「一夜流れの仇夢も、別れば惜しき人心、まして馴れ染めもう五年、子までなしたる半七さん、炎の中で暮そうが、あなたをのいて片時も、浮世の日影が見らりようか、むごい、つれない、胸怒な、別れという字はきいてさえ、胸にしみじみ悲しいと、恨み涙にくれいたる。

三、一中都見物左衛門

享保十一年(一七二六)正月十六日より、江戸市村座初演。『歌舞伎年表』に「(二世)都一中浄るり、道行にて都見物左衛門(竹之丞)大当り」とある。二世都一中、都千中、三味線都千弥の出演で、好評につき夏にも再演されている。狂言の見物左衛門の趣向を借りて、京都の風物を述べたもので、終りをめでたく万歳で結んでゐるのは楽しい。

見物左衛門というのは、「お上りさん」というような意味で、京都の名所をうたつたこの曲が、江戸で大当りしたところ、当時の江戸人の上方文化に対するあこがれのようなものが感じられる。

「五色の外に色という、五色の他に色という、ものは手染の情なり。へかように候者は、洛中第一の果報者、東西南北の分け里を、毎日見物

左衛門とはわれれです、親なし子なし商売なし、世話なし苦なし他愛なし、世界は広しわが庵は、都の辰巳耳塚の、京へは遠きつんぼ谷、きかぬが仏大仏殿、さてさて大きなお仏さま。うけたまわれればあの鼻の穴から傘さして出らるる由、そうもござろう、あの仏さまを産ませられたお袋さまの腰の廻り、検地のほどが思いやられました。さてまたあの両の手の大ききで、なろうことなら銭が百、しめてもらいたい、まことに仏を拝んでから、思わぬ欲がおこりました。やあ、あれへ見ゆるは恋のわけ知り好色女、いたづらそうなしこなし、幸い所の名物をも尋ね、どうぞ道連れになりとう存する。へのうのうそさまは所の人か、ちと尋ね申したき事の候。へ所の者にお尋ねありたきとは、何事にて候ぞ。へいや苦しからず、われ事は都見物左衛門と申す者、うけたまわれればこの所に、女大夫和歌の前、芝居興行召さるる由、ちと覗いても大事なくば、名ざえ見物左衛門じや、棧敷下でも舞台でも、仕掛の穴の中からも、そこが好物覗きたい、どうぞちらとなるまいか、へや、これは何よりやすき御事かな。

「へいごこなたへと夕顔の、扇で招く手で招く、招くに來たる幸いの、色様方の床几をば、仮りの御縁も何を種、身は浮草のゆうゆうと、寄るべは島の千歳が、櫓太鼓のとうからから、唐も日本も世盛りも、恋の市日と賑わえり、わしが覚えし品々を、あらまし語り申すべし、きこし召され候えと、語るぞ浮世なりけらし。

二上りへまずあれをば御覽せよ、あの門前に隠れなき、日本一の大仏餅、大仏煙管さまさまに、羅宇の数は、へ三万、へ三千、へ三百、へ三十、へ三本なり。東に見えしは清水寺、地主の桜や音羽の滝、心やさかの当世女、作り眉墨ねずみ啼き、簾ほのめく奥座敷、麓に花の真葛ヶ原、登れば石のきざはしも、角のとれたる、ナオスへ岡山や、祇園香煎筒守り、(中略)へ千鳥掛けなる鼓とや、きけばこりやまあどうしようの、解毒一粒万倍と、誰が跳ねそめしつんきりの、かるたは笹屋布袋屋の、身を粉に砕く道喜のちまき。

へ咲いたや桜になぜ駒つなく、駒がな勇めば花が散るとな。へ勇めば駒が、駒がな勇めば花が散るとな。へ契りし人の恋歌を、忘れもやらでうかうかと、歩む姿や花の露、伽羅の油や艶白粉、五両入りや三両入り、空値なしとやまじりなし、植木大蔵みすや針、雨の漏り来る灸ねの、膏薬はらい大黒舞い、節季候、うばら、鳥追いの、老の姿や若緑、若水男

若恵比寿、万歳樂とぞ囃しける。
三下りへ年若やかなる御万歳と、御代も栄えまします、愛敬ありける新玉の、年たち返る朝より、美面も若やき器量も一きわあがりけるは、まことにめでとう候ける。昔の女郎はほんじやりと、中頃は張り強く、今の女郎と申するは、よろず吉野の花紅葉、松梅かこい局まで、ナオスへ色品姿の派手競べ、変らぬ仲の友白髪、尉と姥とは高砂や、相生の松尾上の鐘、金持大尽福大尽、福寿海門満万年、国民繁昌千秋樂、万々歳とぞ祝いける。

四、清元篋花平向橘(吉原雀)

かたみのはな、たむけのそでのか

文政七年(一八二四)二月、江戸市村座初演。三升屋二三
治作詞、清元齋兵衛作曲。

長唄の「吉原雀」(明和五年一七六八)の趣向を借りて、その面白さを新らしく作曲したもの。長唄は顔見世狂言の一部だったのが筋があつたが、こちらでは、男女の鳥売りが出て、すががきで引抜いて局女郎といさみの踊りに作り変えてある。いかにも文政期の江戸の気分を代表するよつな曲である。

へ俳優の昔を今に教え草、吉原雀の旧事を、ここに移して三つ扇、誰も三升とやつし事、へ凡そ生けるを放つ事、へ人皇四十四代の帝元正天皇の御宇かとよ、養老四年の中の秋、宇佐八幡の託宣にて、諸国に始まる放生会。へ浮寝の鳥にあらねども、今も恋しき独り住み、小夜の枕の片思い、可愛い心と酌みもせて、何じややら憎らしい、二上りへその手で深みへ浜千鳥、通い馴れたる土手八町、口八町に乘坐

五、常磐津 恩 愛 贖 関 守

おん あい ひとめのせき もり

文政十一年(一八二八)十一月、江戸市村座初演。奈河本
助作詞、五世岸沢式佐作曲。

源義朝の遺児今若、乙若、牛若の三人の子を連れた常盤御前が、雪の木幡の関で、弥平兵衛宗清にとがめられ、子を助けるために、六波羅の平清盛に降るといふ場面。

原拠は義太夫節の「源氏烏帽子折」二段目宗清館。初演のとき、この場が変ると鞍馬山の場になり、これはすべて牛若丸の見た夢であつたということになつていた。そのことは正本の角書にも「操の常盤と夢にしら雪」とある。実際にも安政三年(一八五六)に再演されたときに、長唄の「鞍馬山」を上演したことがあつた。話の筋はわかりやすく、全体の進行には近代的な感じがする。

へ故郷を出でしにまさる涙かな、夢に別るる枕とは、げに定家が詠歌も、へ身に呉竹の伏見なる、知迎の方を尋ねんと、紫竹を出でて後や先、へ歩み留わぬ道芝の、雪の剣に裳さえ、紅さそう照草の、今は果敢なき常盤の前、痛わしや今若と、乙若君を両袖に、包めど余る憂き事の、世を牛若は懐中に、凍る乳房を抱き寝の、へ顔を見るさえいとどなお、歩み疲れておわしける。

へ母様あふのうござります。必ず怪我して下さるなや。

へおお今若ういうてたもつた。紫竹の里を出でしより、たよりに思うはそなたばかり、思えば昨日は昔にて、鏡が石に影頼み、三人の子供は儲けても、御運拙き源のこの行末、必ず平家の武士に、見咎められぬようにしてたもつた。とこういううちに伏見へも聞はない。二人とも辛抱して歩いてたもつた。

へいえど乙若頑是なく、

へもう歩くのはいやじゃ、いやじゃ。

られて、沖の鷗の二挺だち、三挺だち、素見ぞめきは椋鳥の、群れつつきつつ格子先、叩く水鶏の口豆鳥に、孔雀ぞめきて目白押し、見世清揺のてんでつとん、さつき押せ押せえ。ナゲアシへ馴れし廓の袖の香に、へ見ぬようで見ようで、客は扇の垣根より、初心可愛ゆく前渡り、へさあ来た、来た来た、来た来た、ナゲアシへ深山の奥の、ぐつとの奥の詫び住居、へ憎いぞえ。へそうした黄菊と白菊の、同じ勤めのその仲に、へきりと呼ばれるはかなさは、カンへ年があくの待ちかねて、やっぱりしたばと呼ばれたく、男ゆえなら楽しみに、新内ガカリへ苦海する身を立てるとて、義理一遍のあだつきは、結句心のもめる種、へ勤めする身も素人も、女子に二つはないわいな、へよしてくれよしてくれよ。

チョコクレへ吉原雀の雛から飼われて、へ山雀小雀の嘴なんぞで、てれんの初音を、へきいてもくんねえ、へうそ鳥やないとの日文の駒鳥、そこらの目白が、へ見つけてせきれい、へ約束雲雀は昼でもよしきり、一寸格子へ顔鳥出せとは、へさりととはひわ鳥、へ鶯の、へ魂胆秘密は手管のくだかけ、へ奇妙鳥類、かこの鳥、へわけも何やらおかしらし、三下りへ文の便りになあ、今宵ごんすとその噂、いつの紋日も主さんの野暮な事じゃが比翼紋、はなれぬ仲ではないかないな、へ面白や、へげに花ならば桜時、月なら最中竹村に、その青楼の名にし負う、新吉原という雀、今に噂や残るらん。

へこれはまたどうしたもの、今にねんねをさすほどに、ききわけて歩くものじゃ。それ見や、向こうが雪明りで、鳥羽の繩手や、木幡の里、へやがて木幡の山越えて、馬はあれども徒歩はだし、君を思えば行くぞよと。歩くものには花紅葉、花の手車手を引いて、へ歩みかかれは雪風に、笠を取られじ突く杖の、雪に涙も玉錐の、その道もせを行き悩む。へ夜中といひ怪しい女、幼児を大勢連れ、この関を越す気であろうが、このところは木幡の関、へ義朝が残党詮議のため、宗清殿の厳しい固め、さあ有様に名乗って通れ。

へさあ妾はもと都の市人、伏見の辺へ知迎あつて、尋ねるうちにこの大雪、二人の子供に道拂ゆかず、思わずも日を暮らしたり。どうぞ惜にこの関を。

へやあ、そう吐かすほどなお怪しい。さあ女め、へと立上れば、へやれ待て兩人、きけば子供を連れた女とな、源氏の余類に似合いの註文、身がじきじき糺してくりよう。

へ何か思案の宗清が、氷る足駄に善悪の、邪正の道を踏み分けて、関の扉の庭伝い、へ賤しからざる上臈の、供をも連れずただ一人、見れば幼ない子供を連れ、はてあでやかな。へきつと眺めていたりしが、

へこりや、こりや女よく聞けよ。今四海ようやく穏やかなるも、先だつて亡びたる左馬頭義朝、大勢の子供あつて、所々方々に漂泊なし、ことに五條の雑仕常盤が腹には、三人の男子ある由。生け置いては後日のため、見付けしだいに首打と、新たに立てしこの関所、この宗清が眼力に、一目見たれば免れは無い。常盤なりと白状いたせ。

へ様子問われて塞がる胸。

へええ、そんなら三人の子供があるゆえ。さあその疑いも子供ゆえ。子のある女はいづくにも。

へああいわれなそのいいぬけ、子供は事はさておいて、いわずと知れた芙蓉の岬国色のきこえある常盤御前、ほかにあろうはずがない。身が引つ立て福原殿へ。

へすりや妾をどうあつても。ほんに思えばこの身の濡衣、是非もなき世の有様じゃなあ。

へこりやものども、大事の落人関所の庭へ。

へさあ女め立とう。へ是非なくもあらしこに、引つ立てられて常盤御前、

へ隙間もあらは遠近の、たつきも知らぬ閑の庭、巢を離れたるうぐいすの、へ吹雪に迷う風情なり。
へもうこうなつては籠中の鳥、へ素性を明かして助かるか。いやさ、もし常盤なら手にかける。また松ならば助けるとも、思案きわめて返答いたせ。

へさあそれは。
へさあ、さあ、さあ。
へなるほど妾こそその常盤、とても叶わぬこの身の行末、さあいさきよう手にかけて。
へおよい覚悟、観念なせ。
へ抜き放したる水の刃、峯の吹雪に照りさそう、光は夜半の月代と、見紛ううちにこはいかに、刃物はそれで谷風の、岩の間に雪散つたり。
へやや、そりやみずからろ助けんとて。
へ松を助くる制札の、掟厳しき清盛殿、松の操を破れという、迷が解ければその松の、雪も解けよと君の厳命。
へすりやその松に松の操を、
へ色かえぬ松、色かえる松。
へして三人のこの子供は、
へ小枝もともに、へ雪を払うて、へすぐさまこれより、ささ参ろう。
へいざ御供と宗清に、助けられたるおさなこの、その源は谷の音、峯の箭とおとずれて、南柯の夢と覚めにける。

六、三曲千代の鶯

本多平右衛門作詞、光崎檢校作曲。天保(一八三〇―四三)ごろ成立か。京都下の新地という廓の披露曲と伝える。その美しい眺めをうたい、軒に訪れる鶯に寄せて、千代に賑わうことを願ったもの。形式も前唄―手事三段―中唄―手事、チラー後唄というこつたもので、三曲として合奏の美が十分に楽しめる曲となっている。

へ喜びの、眉を開きて天の戸の、一夜明くれば春立つや、霞たなびく東山、前の流れは底清く、加茂の川瀬の曙に(合の手)
へ寝耳に水の幸いを、告げてや遊ばん百千鳥、友呼び集う笹舟の、つなぐ緑しの親しみも、霜の新地のうるわしさ、
(手事初段、二段、三段)
へ柳桜のたぐいなく、わきてわが住む軒毎の、
(マクラ、手事、チラーシ)
へ飾りえならぬ花の緑しを、万代呼ばう鶯の声。

七、長唄柳雛諸鳥囀(鶯娘)

宝暦十二年(一七六二)四月、江戸市村座初演。「柳雛諸鳥囀」四変化舞踊の一。塚越三三治作詞、富士田吉次と杵屋忠次郎作曲。
雪の降りしきる水辺にたたくむ白鷺の姿を借りて、恋に悩む若い女性の心をうたった曲。解釈のしかたによつては、非常に象徴的であり、現代にも十分に通じるところが多くある。古い長唄らしく全曲三下り。曲だけが伝わっていたが、明治十九年五月に九代目団十郎が踊ったとき、三世杵屋正次郎が大はばに手を入れ、現行のようにしたと伝える。

三下りへ妄執の雲晴れやらぬ朧夜の、恋に迷いし我が心、へ忍ぶ山、口舌の種の恋風が、へ吹けども傘に雪もつて、積る思いは淡雪の、消えてはかなき恋路とや、へ思い重なる胸の闇、せめてあわれと夕暮に、ちらちら雪に濡れ鷺の、しよんぼりと可愛ゆらし。へ迷う心の細流れ、ちよろちよろ水の一筋に、へ怨みのほかは白鷺の、水に馴れたる足どりも、濡れて雫と消ゆるもの、へわれは涙に乾く間も、袖干しあえぬ月影に、忍ぶその夜の話を捨てて、
クドキへ縁を結ぶの神さんに、取り上げられし嬉しさも、あまる色香の恥かしや、へ須磨の浦辺で潮汲むよりも、君の心は汲みにくい、さりとては、実に誠と思わんせ、へ縋子の袴の裳とるよりも、主の心が取りにくい、さりとては、実に誠と思わんせ、しやほんにえ、へ白鷺の羽風に雪の散りて、花の散りしく、へ景色と見れど、あたら眺めの雪ぞ散りなん、雪ぞ散るなん、へ憎からぬ、
鼓唄へ恋に心も移ろいし、花の吹雪の散りかかり、払うも惜しき袖笠や、へ傘をや、へ傘をさすならば、てんでんでん日照傘、へそれえそれえ、

さしかけて、いざさらば、花見にこんせ吉野山、へそれえそれえ、匂い桜の花笠、へ縁と月日を廻りくるくる、へ車がさ、それそれそれ、そうじゃえ、へそれが浮名のはしとなる、へ添うも添われずあまつさえ、邪櫻の刃に先立ちて、この世からさえ剣の山、へ一じゅうのうちを恐ろしや、地獄のありさまごとく、罪を糺して閻王の、鉄杖まさきありありと、等活畜生、衆生地獄、あるいは叫喚大叫喚、修羅の太鼓は隙もなく、へ獄卒四方に群がりて、鉄杖振り上げくろがねの、牙噛みならしほつ立てばつ立て、へ二六時中がその間、くるりくるり、追い廻り追い廻り、ついにこの身はひしひしひし、あわれみ給えわが憂き身、語るも涙なりけらし。

'85都民芸術フェスティバル参加公演(昭和59年度東京都助成公演)

分野	種目	公 演 内 容	期 日	会 場	入場料金	問 合 せ 先
音	オペラ	作曲 團伊玖磨/作詞 木下順二「夕鶴」 (日本楽劇協会)	1月19日・20日	東京文化会館	8,000~1,500円	(社)日本楽劇協会 (478)5670
		作曲 W.A.モーツァルト/訳詞 中山樞一 「魔 笛」(訳詞上演) (二期会オペラ振興会)	2月1日~3日	東京文化会館	8,000~1,500	㈱二期会オペラ振興会 (370)6441
		作曲 G.ビゼー/作詞 H.メイヤック L.アレヴィ 「カルメン」(原語上演) (日本オペラ振興会)	3月9日~11日	東京文化会館	8,000~1,500	㈱日本オペラ振興会 (371)5384
楽	オーケストラ	第16回 都民のためのコンサート	オーケストラ 2月4日~21日	東京文化会館	2,000~1,000	(社)日本演奏連盟 (437)6837~8
		室内合奏	3月8日	東京文化会館	2,000	
		シャンソン	3月8日	よみうりホール	2,000	
邦楽	邦楽	第15回 邦楽演奏会	3月10日	第一生命ホール	1,500	邦 楽 連 合 会 (545)3778
演	新劇	M・ゴーリキー「どん底」 (合同公演)	1月9日~22日	東 横 劇 場	3,000	劇団青年座製作部 (467)0439
		「おうまにばけたきつねどん」他 (人形劇団ひとみ座)	1月26日~3月21日	品川区勤労者福祉会館	800~500 無料招待有	日本児童演劇 劇団協議会 (409)1797
		「うそつきピョン吉」他 (劇団エンゼル)	1月2日~20日	調布スポーツセンター特設館		
		「2+3」 (劇団風の子)	1月6日~2月3日	中野文化センター他		
		「トランク劇場」 (劇団風の子)	1月6日~3月3日	シアター代官山他		
		「小さい劇場」 (劇団風の子)	1月12日~26日	東 芸 劇 場 他		
		「トリックトラック探してい団」他 (人形劇団ポロ)	1月27日~3月26日	小平市中央公民館他		
		「おやゆびひめ」他 (人形劇団クラルテ)	2月2日~17日	武蔵野芸術劇場他		
		「ピノッキオ」 (劇団こくま座)	2月11日・17日	中野区南部公会堂他		
		語り芝居「むかしあるときあるところ」 (池袋小劇場)	2月16日~3月31日	池袋小劇場他		
		語り芝居「クレール男」 (池袋小劇場)	2月23日~3月30日	池袋小劇場他		
		「とびだせ人形1.2.3」 (人形劇団むすび座)	3月21日	町田和光鶴川幼稚園		
		「さんぼの冒険」 (劇団しらかば)	3月22日~31日	荒川区民会館他		
舞	バレエ	「シルヴィア」	2月8日~10日	東京文化会館		
			2月23日	立川市民会館		
	エ	「眠れる森の美女」	3月1日・2日 ・4日	東京文化会館	6,000~2,000	牧阿佐美バレエ団 (460)9411
	現代舞踊	「スキタイ組曲」・「彼方の森」 「鎮魂歌夏の花」	1月12日・13日	東京文化会館	3,000~2,000 無料招待有	(社)現代舞踊協会 (400)4544
	日本舞踊	社団法人日本舞踊協会設立30周年記念 第28回日本舞踊協会公演	2月13日~15日	国立劇場	5,000 無料招待有	(社)日本舞踊協会 (533)6455
古典芸能	能	都民能	1月19日	国立能楽堂	2,500	(社)能楽協会 (574)6441
		翁付式能	2月17日	国立能楽堂	4,500	
	民俗芸能	第16回 東京都民俗芸能大会	2月23日~24日	大田区民センター他	無料招待	東京都民俗芸能大会 実行委員会事務局 (894)6923
寄席芸能	第15回 都民寄席	2月2日~22日	品川荏原文化センター 他7会場	無料招待	都民寄席実行委員会事務局 0423(81)5534	

これらの個々の公演種目に対するお問合せは各団体に、
助成公演全般についてのお問合せは、
東京都教育庁社会教育部文化課 TEL (212)5111
(内) 44-531
(内) 44-532